

共感的理解と客観的凝視

赤池憲昭

ウィルソン論文『近代科学における宗教社会学の学問的位置』⁽¹⁾を読み終って、学生時代、当時の宗教学研究室

の主任教授であった岸本英夫先生の話をはからずも想い出した。研究室の某先輩が先生に、「宗教学をやめたい」と申しこんできたそうである。先生がその理由を問われると、先輩の答えは次のようなものであったという。

「宗教学は自分の研究対象である宗教を、批判したり否定したりする学問のように思える。研究対象に愛着のない学問には私は愛着はもてないから」。これに対する岸

と考えていたからである。したがって、先生の反応もややオーヴァー過ぎるという気持でうけとったと思う。

しかし、いま、ウィルソン論文を読んで、私のその折の感想はありきたりの平板なものに過ぎず、先生の示唆された意味は実はもっと興行きのあるものであったのではないか、私の浅薄な反撥心が先生の深い響きをもった言葉を記憶の外へ失わせてしまったのではないかと恐れている。ウィルソン博士の表現をかりれば、宗教は生命そのものであり、具体的な個人や集団がそこにおいて生きるものであって、この事実と共に鳴しそこから宗教をすくい上げないかぎり、真に宗教を理解することは不可能であるという。しかも、一方では、常に具体的姿をとってせまってくる宗教に巻きこまれることなく、公平な尺度による比較検証をおこない、価値中立的立場を維持しなければ科学的研究の資格を失うという。

「共感ある客観的態度」(sympathetic detachment)は、厳密にはほとんど二律背反に近い言葉である。しかし、ここにこそ宗教社会学者としての研究態度の基本的場が存在する以上、この態度を自覚的に生きるほかはないこと

本先生の回答ははっきりとは想い出せないが、先輩の言葉に、隙を突かれたような思いであった、というのが、先生の私たちへの座談であったとわずかに記憶している。

たぶん、私はその時、内心で先輩のいい分にも先生の反応にもすなおにうなずけない感じを抱いたと思う。漠然とした印象であったが、その頃の私には宗教学研究がむやみに宗教を批判・否定する雰囲気であったとは思われなかったし、また、研究である以上、対象に一定の距離をおくことはむしろ当然であって、そのことと、好悪いずれにしる宗教への個人的感情とは別のものであろう

をウィルソン論文は主張している。論文の骨子は、結局のところ、現代における科学的宗教研究にさいしての研究者の主体的態度が、いかにあるべきかを問うものである。あるいは「いかにあるべきか」という評価的表現よりも、宗教の在り方からして、「そのようにあるほかはない」という勧告とみたほうが、ウィルソン博士の趣旨にはそつているといえるかもしれない。

いずれにしても、この態度提言そのものについては、現代の宗教研究者の大部分が肯定できるのではあるまいか。宗教批判ないし宗教否定という予見に立つ宗教研究が、イデオロギー的な宗教賛美の場合と同じく、科学的には受け入れがたいとするウィルソン博士の批判は、すでに一般的承認をえていると考えてよいであろう。

ウィルソン論文全体の論述は、こうした研究態度の妥当性を補強するためのものである。一つには、宗教社会学の学説史を素描しながら現代の宗教研究の背景となつた論点を指摘する。第二には、科学的研究方法ないし手続きを祖上にのせ、研究上の必須要件をあげながらその条件づけをおこなう。第三は、宗教社会学と隣接諸学科

との境域を追求し、宗教社会学独自の位置づけをさぐりながら、二との関連で具体的な調査手続きを通じ宗教社会学者の研究態度を例示する。これら三つの支柱にみられる論旨については、個々には異った視点からの批判・修正はあるだろうが、総じて、上述の研究態度の勧告へと収斂する過程としてとらえれば、それほど大きな異論が生れるとは考えられない。ウィルソン論文をめぐり、賛否両論の激論が交わされる可能性は予想しにくい。

だが、現実には、ウィルソン博士の宗教理論に対しては、一方で有力な対立意見があることも事実なのである。

この対立は、結局は「宗教をどう定義するか」にかかわる課題と関連し、とりわけ「宗教の世俗化論」をめぐる論争は一気に頂点に達する。当面の論文では正面からは論じられていないものの、それでも注意して拾いあげれば論争の火種となりうる発言が、時折見ええかくれしている。しかし、この側面は今回括弧にくくっておきたい。触れるとしても最小限にとどめておく。これはこれで、別箇に論じられるべき性質のものであろうから。

ここでの取りあつかいとしては、二つの面からの作業

る。それゆえ、宗教社会学は社会学の小円ではあっても中心を同じくする同心円であり、隅の首石的存在であった。

A・コントからD・デュルケムにいたる社会学の古典時代にふれて、狭義の社会学にとまらず広く社会科学の立場からする宗教理論が、一般に宗教の役割を批判しあるいはその後退を明らかにしようとする方向で論じられてきたとウィルソン博士は概観する。この流れは、機能主義理論の登場によって、宗教の役割の積極的評価へと転流されるのであるが、博士によれば、そのさい宗教は機能的な有効性(たとえば社会統合の働き)としての側面だけが強調され、働きとしての宗教は残っても宗教者がそこにおいて生きる実体としての宗教は影を薄め、ついには一種の「役に立つ虚偽意識」に転落しかねない。

ウィルソン博士によれば、宗教は人間の知的・評価的・感情的レヴェルの総体的連関のうえに成り立っている。一つ一つのレヴェルについて宗教の代替物が指定されたとしても、それらを合算して宗教に代るものとはならない。博士はいう。「宗教の社会的意義は次のようなカテ

を試みてみようと思う。一つは当面のウィルソン論文のコメントであるが、これについては、むしろ、要約的な紹介を主としたい。つまり、博士の論旨にそって理解を深めるといふ作業である。第二は、当面の論文内容そのものからはやや離れて、博士の代表的研究分野であるセクト論を参照しながら、これを日本における宗教社会学的課題とつき合わせ、科学的宗教研究の国際化のための一考を試みる作業である。

二

ウィルソン博士は社会学と宗教社会学との区別にはこだわらない。宗教社会学が社会学の一部門であり、社会学的方法に準拠して宗教研究をおこなう領域であるという意味からすれば、宗教社会学は社会学の大円に包摂される小円であって、両者は同じものとはいえない。しかし、社会学は、その成立の事情からみれば、宗教(キリスト教)から生い立った学問であり、その後の展開と自立化の過程においても、常に宗教との批判的ないし肯定的かかわりのなかで、その特質を闡明してきたのであ

ゴリーやシンボルを提供してくれるところにある。すなわち、人間が自己をとりまく状況を理解し、その状況に一定の評価を下し、状況との感情的な一体感を体得する——これらのことがらを、同時に円滑に達成させるカテゴリーとシンボルの提供である。

宗教の総体的性格は、宗教言語の特異性にも反映されている。宗教言語は一般に認知と評価と共感とを同時に人間に伝達する。

ところで、このような宗教の個性から考えると、抽象的次元での機能論的分析だけからでは、宗教をとらえることは困難である。生きた現実の形態において把握されるほかはない。博士が宗教をあくまで現実生きる組織体を通じてとらえようとする理由はここにある。宗教はなによりも宗教的コミュニティにおいて存在する。その範例がセクトである。

それでは経験的現象として私たちの前に現存する宗教を、宗教社会学はどのようにして解明するのであろうか。社会学をはじめとする社会科学が、自然現象を対象とする自然科学とは、方法的に一線を画すことは改め

ていうまでもない。このことを前提としたうえで、ウィルソン博士は科学とは次のような条件を満たす学問分野を指すという。

- (1) 経験的現象が客観的方法によって探究されること。
- (2) 公平な尺度によって測られること。
- (3) 研究者が常に倫理上の中立性を明確に自覚すること。
- (4) データを客観的態度で処理すること。
- (5) 個々の現象を一般理論に統合し、抽象的概念用語を用いて純理論体系を構築すること。

右記のうち、(1)(2)は方法上の問題、(3)(4)は研究者の態度に関して、(5)は研究目的にかかわる条項というように区別することもできる。(5)に関連していえば、博士は社会学を「蒸留方式の学科」とも呼び、多量のデータを蒸留して簡明な命題へと還元するのが科学的研究の目的であるとのべている。

しかし、ウィルソン論文の主眼点は、研究方法に関する具体的指示と、それを媒介としながら最終的には研究

者の主体的態度を問うところにある。方法論というようないかめしいいい方は、おそらく、この論文の内容にはなじまない。研究上の実際的手続きや研究対象の具体的あつかい方に論述のウエイトがある。たとえば、情報収集にさいする面接法の重要性、それと裏腹の質問紙法の限界の指摘などがこれである。

だが、とりわけ博士が強調する要点は、データに関する問題であろう。科学的研究である以上、宗教への直接的コミットメントは制限されねばならない。けれども宗教はその出発点においては個人的関心事でもあり、信仰者の信念や心情を理解することによって、有意義なデータを収集できる。当事者の自己解釈・自己理解のあり方こそ、宗教研究の基本的データである。勿論このような方法的個体主義は、蒸留方式を介して社会的脈絡のなかでの類型化・法則化へと昇華されねばならないのであるが、信仰者にとっては「真情」であるものが、研究者にとっては「データ」となる。とくに宗教のように、価値によって充電され、それに触れる者には行為者としての選びを要求してくる対象の場合、単に「データ」と

して割り切ることができるとかどうかには疑問の余地が残る。にもかかわらず、研究者はあえてデータチメントし

なければならぬ——特定の価値の領野にまきこまれることから踏みとどまり、公平な視野に立つて比較対照する客観的態度をとらねばならない。

といっても、ひるがえって宗教の場合、公平で客観的な取りあつかいをするためには、具体的なそれぞれの宗教についての理解と共鳴とがなければ不可能である。それなしには宗教は冷たいむくろと化してしまう。ここにウィルソン博士のいう「共感ある客観的態度」が要望される。それは相手に対する限りない思いやりと、自己に對する止むことのない反省とによって、かろうじて可能となる態度である。

宗教の性格から考えて、社会学の用語のなかには宗教を論ずるには不適当なものもある。とくに非人称的抽象的名辞では宗教をとらえるのがむずかしい場合が多い。時によっては宗教社会学者は文学的表現手段に訴える必要もあるであろう。こうした表現上の一般の問題に加えて、宗教社会学が内包する文化的偏差に由来する難問が

ある。

宗教社会学の成立事情からも推定できるように、キリスト教神学の概念用具からひき出されて分析上の基本的カテゴリーとなった専門用語が、宗教社会学には数多く存在している。たとえば、聖と俗、世俗と超世俗、正統と異端などである。宗教社会学が、普遍妥当性を求めて、キリスト教の文化的背景を抜け出すことは容易ではない。しかし、「公正」「倫理的中立性」「客観性」という科学の原則にしたがい、文化的遺産を背負った言葉を可能なかぎり一般的用語に移しかえる努力は続けなければならぬ。このさい、特定の信仰者の用語を共感的に受けとめ、しかも客観的内容で満たすこと、さらにそれを一般の人々の使用する平易な言葉に移しかえ、専門用語の氾濫を抑えるように、とウィルソン論文は提唱している。宗教用語がとかく難解であるところから生れやすい言葉の呪術性をしりぞけるためである。宗教社会学を常に共通の広場におこうとするウィルソン博士の意図が、言語使用の問題についてもよくあらわれている。

これに先立ち、ウィルソン論文は、宗教社会学の領域

を明らかにする目的で、歴史学・心理学・比較宗教学・現象学などの比較対照をおこなっている。宗教社会学は一方で宗教現象を社会的脈絡のなかに位置づけるとともに、他方、宗教的価値とかかわりながらその解釈をおこなう学問であること、そのさい、「宗教的社会学」(sociologie religieuse)とは峻別されるべきことを博士は要求する。一方では宗教への深い理解と共感を失わず、しかも宗教へのデタッチメントを崩さない態度、この緊張関係の接点でウィルソン博士は宗教を問いつづけているのである。

三

D・E・ミラー氏はウィルソン博士の学風について次のようにまとめている。「あえてウィルソンを分類すれば、ウェーバー学派とよんでよいだろう。彼の方法はウェーバーからえたものである——とりわけ、理想型の使用、比較の重視、方法的個体主義への関心などがそれである。またウィルソンの道徳的関心もウェーバーと共通である。それが、合理化つまり呪術の園から解放され

た世界のもつ社会的意義への関心となつてあらわれている。しかしながら、追つて論ずるように、世俗化の原因に関するウィルソンの最近の主張は、巧みに応用されているが、結局はデュルケムと直接重なり合うものである⁽³⁾。これにつづいてミラー氏は、マルキストの理論とフロイトとの影響をあげているが、これらはむしろ部分的なものである。

ところで、デュルケムとの結びつきというのは、ウィルソン博士が宗教を共同体としての側面からとらえようとする姿勢を指している。「教会と呼ばれる同じ道徳的共同体」に宗教の基本的要素をみたデュルケムと同じく、博士の場合も、すぐれて集団的形態として宗教をとらえる立場に立っている⁽⁴⁾。そして、現代社会の合理化過程が教団の影響力を排除して行く経過に博士は世俗化の過程をみるのであるが、今はこの点には深入りしない。要するに、宗教を教団としてとらえるというところに、ウィルソン博士の基本的視座があるということである。

だが問題はこれにとまらない。宗教的共同体としての教団は、同時に社会的文化的活力を有することによつ

て、その存在理由を証しすることができるのである。ウェーバーの路線にそつて、ウィルソン博士は、「呪術の園からの解放」を導く宗教倫理の合理化の推進に、その証明を見出す。

明確な組織構造を有し、倫理的価値的合理化を体質として保持する教団——その典例は、とりもおさず、近代以降のセクトである。博士の研究の中心テーマがセクトに向けられたのは当然であつた。博士の「セクト論」そのものは、ここでの考察の範囲をこえるが、セクトの基本的性格を、自他を明確に識別する排他性としてとらえ、世俗への反応(世俗拒否の姿勢)に依つてセクトの類型化が試みられている。

ウィルソン博士は、すでにのべたように、自己の宗教社会学的研究が普遍性をもちうるようにたえず留意してきた。たとえば、セクト類型の造形にあつた、最初博士が用いた規準は「世俗に対する伝道」であつた。しかし、「伝道」のもつキリスト教的ニュアンスを反省し、現在の規準「世俗への応答」に変更し、これに依つて類型の内容自体にも大きな修正がほどこされてきている。

また、セクトの世俗拒否に根ざす救済観が、呪術性の濃い伝統主義的社会に倫理的インパクトを与え、社会改革への起爆剤として作用しうる可能性を考へる。この点から、現代の第三世界におけるセクトの活動に関心を寄せらる。つまり、セクトの倫理が、社会を対象化して眺める新しい目を与えることができるとすれば、それは非キリスト教地域における新しい社会的エトスの形成を促す可能性があるということである。

しかしながら、ウィルソン博士も認めているように、セクト概念はキリスト教文化を背景に成立している枠組であり、他文化圏の教団に援用するには限界がある。非キリスト教地域におけるセクト倫理の有効性にしても、結局はキリスト教の影響力の問題に還元されてしまいうだらう。

とすれば、宗教社会学がキリスト教の系譜を脱し、自己の世界性を獲得するためには、やはりそれぞれの文化を担うそれぞれの社会から、自己分析のための独自のフレーム・オブ・レファランスが提出され、それによつて国際的対話を交換しながら共通の地盤を固めて行く他は

ないであろう。

日本の宗教社会学は、なお欧米の理論や研究の咀嚼に多忙であるが、反面、日本の宗教風土に根ざした独自の発言もあらわれはじめている。具体的事例として、日本の宗教集団に関する研究、とくにその類型論的把握と、日本の新宗教のもつエトスの問題をあげておきたい。これは、今までみてきたウィルソン博士のセクトを中心とする教団論、および宗教倫理のテーマに対する日本からの応答と考えられるからである。

前者の課題については、森岡清美・柳川啓一教授をはじめとする「家」を核とする宗教論をあげることができ、それぞれ視点の個性差はあるが、ここでは柳川教授の論旨⁽⁵⁾を中心に紹介しておきたい。日本の宗教集団の基本的単位は「家」である。この点で、原理的には個人の信仰を基幹とするキリスト教の信仰形態とは大きなずれを認めなければならぬ。したがって、合致的宗教集団とは一線を画したうえで類型化されるチャーチセクト類型論は、日本の宗教集団には適用し難い。日本における宗教集団の類型を考えるとすれば、「家」(としての宗教

集団)と「群」(としての宗教集団)が、両極的位置におかれるだろう。「家」と「群」との間に、「檀家集団」氏子集団、「講集団」、「祭り集団」などが配置される。これらの宗教集団を成り立たせる規準は人間関係であり、したがって人間関係の在り方によって神仏という複数の信仰をもつことも当然として受け入れられる。

後者のエトス論については、たとえば、対馬路人氏他の新進の宗教社会学者によって、ウィルソン博士の理論を批判的に摂取しながら、日本の新宗教の生命主義的救済観を指摘した論考⁽⁶⁾をあげることができよう。現世利益と救済との結びつきに、日本の新宗教のエトスを見、さらに日本を越えた広い適用を展望している。

宗教社会学は、あるいは、これから真の科学性を目指す学問として位置づけできるかもしれない。もちろん、今までの宗教社会学の成果は重くかつ広い。しかし宗教と社会との関係は、各地域において長い年輪を刻みながら現在にいたっており、その解明には、まずそれぞれの社会的文化的背景による分析装置が必要であろう。ウィルソン博士の表現をかりれば、各々の分析装置はいわば

データであり、これを蒸留して宗教社会学の一般理論が成立するのであろう。

しかし、分析手段や理論化がどのように多様性に富んでいるとしても、研究態度の問題に関しては、ウィルソン博士のいう「共感ある客観的態度」はその永遠性を失わないのではないだろうか。

注

- (1) 論文からの引用箇所については、同論文が全文翻訳掲載される予定と聞いているので、以下とくに注記しない。
- (2) 中牧弘允「現代宗教論の陥穽」、宗教社会学研究会編『現代宗教の視角』雄山閣・昭和五三年、二六一―三七頁な
参考。
- (3) Donald E. Miller, 'Secularism and secularization: The work of Bryan Wilson,' 'Religious Studies Review,' vol. 5, no. 3, July 1979, p. 162.
- (4) ウィルソン論文では、主として宗教の機能をめぐって、博士はデュルケムに厳しい批判を行っている。しかし、集団的形態を宗教研究の土台にすえている点で両者の共通性を指摘するD・E・ミラー氏の見解は妥当であろう。
- (5) 柳川啓一「宗教集団の人間関係」、南博編『日本人の人間関係事典』講談社・昭和五五年、二四〇―二五三頁。
- (6) 対馬路人他「日本の新宗教における生命主義的救済

観」、『CISR東京会議紀要』東大宗教学研究室、昭和五四年、七三―九〇頁。

なお、井上順孝他『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣・昭和五六年は、日本の宗教社会学の現状について有益な示唆を与える。

(あかいけのりあき・愛知学院大学教授)